OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西鶴謎絵考
Author(s)	信多, 純一
Citation	語文. 1974, 32, p. 64-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68624
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

西鶴謎絵考

信多純一

はじめに

古来、洋の東西を問わず、謎々の遊びに人々はうち興じてきた。希臘テーベの丘に繰りひろげられた生死を賭した謎だてほどの規模は持たぬまでも、わが国にてもかしこきあたりをはじめとして賤が伏屋に至るまで、日待の夜などこの智的遊戯に笑いさざめく声が余所に洩れた。

ところで、謎々はあながち言葉遊びのみに限らない。江戸期についてみれば、謎染のごとき、染模様の謎の意を寓したものの流行も一時期あった。明暦以降に現われる、鎌と輪の模様にぬの字を染ぬいた着物で闊歩する六法者などはその一例である。また、判じ絵と称する謎絵、さとり絵の類も書賈の店頭を飾り、商店の看板にまで謎の趣向が盛られ、視覚面でも謎々遊びは行われていた。

はなし好きとして知られる西鶴の書にも謎がある。謎が多い。不可解なことが多いのである。例えば、『好色一代男』の目録の年立てなどその一つで、これまで多くの国文学者を悩ませ、更に他分野の学者までその謎ときに加わらせている。これを作者の錯記と見れば、謎はたちまち謎でなくなる。しかし、これらが作者の意図せるものであるとすれば、やはり依然としてそれは謎であり、西鶴によって投げかけられた謎々というべきであろう。彼は文中、「しる人はしるぞかし」、「跡口舌して起さはぎて踏れける。何か申て気に違ひける、しらずかし」などと表白するが、これは一見叙述内容をおぼめかしたもののようでいて実は、読者に挑戦している言辞のごとく私には思える。

以下は、西鶴本の挿絵における謎だて二題と、それに対する私なりの解答である。

一

『西鶴織留』巻四の一「家主殿の鼻ばしら」の挿絵は、従来不可解の絵とされている。「逆絵」と一般に称する奇妙な図柄である。

この図については、これまで実に種々の見方がなされてきた。それらの諸説を比較してみると、この図全体の理解のまちまちであるのに加え、人物指定やその姿態の説明も各人各様であるという興味ある結果を見る。その関係を判り易くするため表示してみると次のごとくになる。

	滝田	吉江	金井	宗政	前田
A 刀に手をかける男	親爺が外を見つめて刀の柄に手をかけ	扇屋であり、この目が左方の逆の女に注がれてゐる所から察するに…怪異に対して身構へたものであらう。	主人の刀の束に手をかけてゐるのは、怪異に対してであり		脇差の柄に手を掛けているのは扇屋の亭主
B 手をあげる女	後方の女房は立膝で両手を挙げ、何物かを抛った姿	気狂ひ女が子供を抛げる	女房の手を振りあげてゐるのは、物を抛げてゐるのではなく、驚きの型の一つである。		傍の手を振り上げて驚いているのは其の女房
C うつぶせの女	女房の前方には一人の嬶が畳の上にうつむいて泣き	うつ俯せになってゐる女は…恐ろしさに耐で目を蔽ひ、わな〳〵震へながら畳に伏した扇屋の女房			うつ伏している女
D 倒れている少年	前方の庭に少年が抛げつけられてゐる。	抛げられてゐる少年	庭の若者も、まさに怪異によって逆立ちにされかけようとしてゐる		土間に倒れている少年は、近所の住人か
E 井戸端の女	井戸ばたに立つ手桶を提げた女で、この絵全体は逆様に描かれてゐる。女の髪は逆立ち、手桶の水は為に濡れてゐる。	（水汲む婢女）ひとり逆様に描かれてゐる…顔を右方の男に向け、男もこの女を凝視したまゝ刀に手をかけてゐる。…この女こそ絵師の考へた逆柱の怪を為す亡霊ではないか	倒立の女の姿	逆髪の女は狂女を示す…左右両画がともに逆柱の家を示したとするならば女が逆髪になっていることは理解しえない。…背後の波状のものは同人のかけりのさまを表わし、狂女であることを示す	左側は、総て逆様に描かれているが、手桶を持った水汲み女が逆柱の怪異と言うわけであろう

全体					
右方は、一先づ大家の女房と店子扇屋との喧嘩と見て置く…（左方）転宅先にあった逆柱の怪を画家が想像して描いたものと見る。…画家当人が逆柱に就いて十分の考証なしに筆を執った為、逆柱の怪を表現する安易な手段として、井桁や人物を逆しまに描いてしまったのであらう。	全体の画面構成から言へば扇屋夫婦の第一の転居先、第二の転居先と相次ぐ不吉を一つにまとめ、逆柱の怪を主なるモチーフとしてそれに狂女を配し、全体から一種無気味な雰囲気を感じさせようといふのが絵師の意図であったのではなからうか	両面に逆柱の怪異だけが描かれてゐると見なければならない	右画は逆柱の家、左画は醒井町の狂女、と非連続で、かつ左画は、絵師が描いたのは、今見るのとは上下が逆様であった。それを上梓者が現在の左の画を上下逆置し、全体を統一的にまとめるために左右を入れかえたのである	逆柱の怪異に仰天している状景	

滝田貞治「織留の逆絵」（『西鶴襍俎』昭和十二年七月）
吉江久弥「『織留』の逆絵に就いて」（『国語』昭和二八年九月）
金井寅之助「西鶴織留」（『国文学解釈と鑑賞』昭和三五年十月）
宗政五十緒「世の人心」考（『国文学論叢』昭和三七年九月）
前田金五郎『西鶴織留』（角川文庫昭和四八年三月）

これを見ると、(A)扇屋の親爺（亭主）が、何者かに対して刀に手をかけ身構えているという共通の理解のほかは、すべての人物に対して解釈がさまざまであるという、まことに不可解な構図であることが判る。

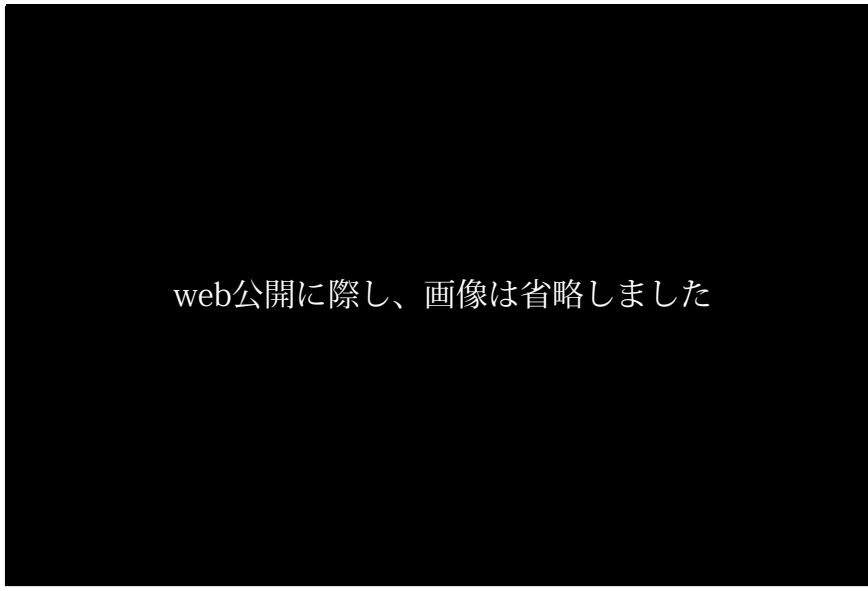
(B)手を挙げる女を、扇屋の女房と見る見方のほかに、気狂い女（第二の転居先、醒井町の隣家の狂女）と見る吉江説があり、この女が少年を抛ったと見る見方（滝田・吉江説）に対する、金井・前田氏の驚きの型という見方の差異がある。

(C)うつぶせの女を他人と見るのに対し、扇屋の女房と見る吉江説、さらにこの女が泣いていると見る滝田説に対し、恐ろしさで震えている景ととる吉江説がある。

(D)庭か土間に倒れている少年（子供）と見る見方があると思えば、この少年は(B)の女に抛げつけられたとする滝田・吉江説があり、さらに怪異によって逆立ちされかけようとしているとする金井説等々、右図についても諸説紛々としている。

とりわけ、(E)左図の井戸端の手桶を持つ女については、その解はまちまちであり、一般に水汲み女（婢女）としているが、変ったところではこの女の逆髪に注目して醒井町の狂女（『蟬丸』等が連想されるとして）と見る宗政説がある。

全体の構図としては、逆柱の怪異だけの一状景と見る見方の金井



・前田説がある。二場面説では右方大家女房と扇屋女房の喧嘩の体、左方逆柱の家の体とする滝田説、右方逆柱の家、左方醒井町の狂女で、左画は元来逆様であったものと見る宗政説などがある。また一続きのものではあるが、二場面を一図にまとめて全体無気味な雰囲気を感じさせるよう意図したとする吉江説もあり、その解釈は多岐にわたっている。

諸氏それぞれに、従前の説を批判しておられ、ここで一々に対して批判する煩は避けたいと思う。この絵から受けるごく普通の印象としては、一番最近の前田説あたりが、素直な見方のように私には思える。

人物の説明が穏当で、且つ両面でもって「逆柱の怪異に仰天している状景」と簡単に説明された前田説に賛意を表するが、それにしてもこの本文にも見えない逆柱の怪異は、並のものではない。当時の逆柱のたたりについての常識をはるかに超えるものであることは、諸家の考証の通りである。それに、物みな逆様になっている中で、人は逆様でない。その間にあって左図の女のみ逆様になり髪も逆立ったように描かれていて異様である。その意味で、やはりより突っこんだ解釈の必要があろう。その故にこそ、これは外界の物怪（滝田説）、亡霊（吉江説）とする説明や、逆髪の狂女の絵が書肆のさかしらで逆に彫られたとする宗政説、この女一人が逆様なのではなく、少年も逆さにされかかっているとする金井説などが存する所以である。

これに対する解釈を私も諸氏の驥尾に付して行ってみたいと考えるが、その前に一つの作業の必要を感じる。すなわち、ここで当時の慣習的見解を探ってみようと思うのである。この種の〝逆さの女〟

の心象とは、当時の人々にとって一般にどう受けとめられていたものであろうかという点の考察を行ってみたい。

二

『因果物語』（古典文庫『因果物かたり』）平仮名十一行本巻二の一「妬て殺せし女主の女房をとり殺す事」の章の挿絵に、下の掲出図のごとき逆さの女の図を見る。平仮名抄出本『諸国ものゝけ物かたり』（古典文庫『因果物語二』）のその図は、門前の景になっているが女の姿態は同趣である。

濃州の或る牢人が舟で川を渡る時、女の「足を上になしてさかさまに立たる人」が現われ、庄屋の内に使われていたが不慮の妬により非分の死を遂げたものである。その舟で渡して欲しいと乞う。更に庄屋の門に至ってその午王屋札をはぎ取って欲しいと牢人に頼み、内に入って庄屋女房をとり殺した後、翌夜真様の姿になって牢人の家に来たり礼を述べる。もとこの亡霊は庄屋の妾で、女房が妬み夫の留守中下男に命じ殺させたもので、その有様を本文は次のごとく記している。

川向に古き井戸のもとの有けるに　彼女をすかし出し　井のはたに立より　古き井なれども水よくすみて人影のあり〳〵とみゆるといへば　女立よりてのぞきける所を　さかさまにつきはめてこころし　世には身をなげたりと披露しけり

このため幽霊となり、つけ狙っていたという筋の話に添えられた挿絵がこれである。

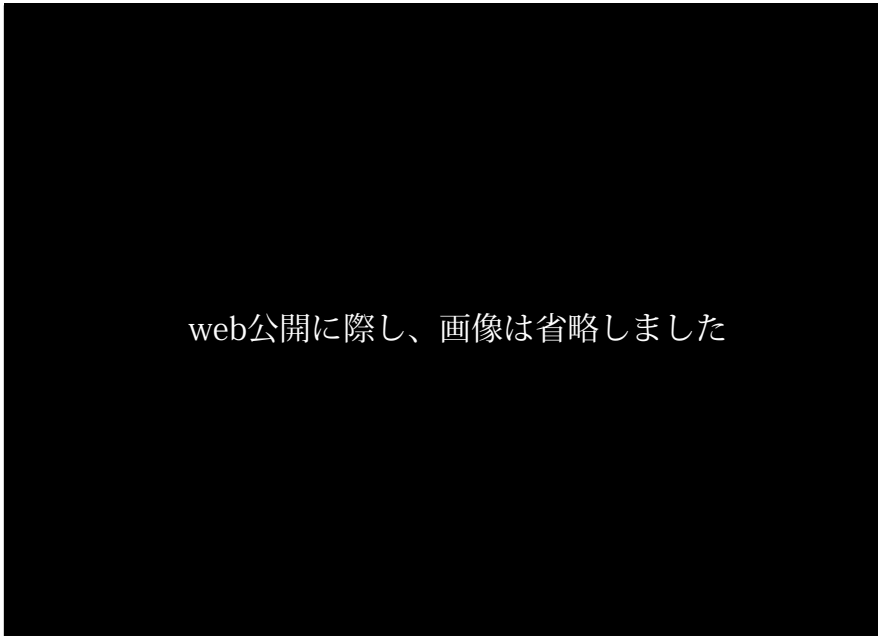
延宝七年卯月刊の加賀掾絵入浄瑠璃本『他力本願記』（古典文庫『古浄瑠璃集（大英博物館本）』）四段目の挿絵第六図にも「下女ゆうれい」と記され、逆さの女が現われる。

出羽の国さゝじまへいまのぜうなかまさという武士の妻が奇病に苦しんでいる。そのさまは次のごとくである。

大ねつさらずロごもり　めはあきながら人を見しらす。あまつさへ　ちかき比よりよふけ人のしづまると。ひかり物とび入ッてとしやうじひゞきなり渡り。家をゆする事あたかもぢしんのごとく也。病人おびへ玉ぎりて　五たいなふらんもんぜつす。

そこで、都よりしんくう上人がこられているので、これを招じ祈って貰おうとする。すると、「さもすさまじき女はうの　あしそらさまに手をついて　なげしのうへにあらはれ出」病人を狙うが、上人の名号の威力で追い払われ、遂に回向によって成仏する話が記さ

web公開に際し、画像は省略しました



れている。これは奥方の嫉妬ゆえに召使いの婢女を罪におとした、その怨念の所為であったと出ている。

元禄六年刊の『念仏大道人崙山上人之由来』(『説経正本集　第三』)という説経節の正本六段目に、上の掲出図のごとき挿絵を見る。

崙山上人が常陸国板子村に来ると、夜半ばかりに化生の女が門前より現われる。「かみはながく、さか様に、あしはそらにおしあけ、ちうをかけりて」仏前へ飛び来たった。この女が上人の問に答えて身の上を語る。

されは某は、むかし此寺のもん前に有し物なるが、わらはかおつと、二道かけ申ゆへ、水から是をせいし申せしを、おつとはわらはをにくみつゝ、あれなる井のうちへ、さか様におとされ、むなしく成て候、それゆへかれらを取ころし、此身もくるしみたへやらねは、たすかりたくぞんし、まよひ候へ共、へんげのものぞとおどろき、みなあいはて申たり、あはれと思召れなば、たすけ給へ御僧と、ちの泪をぞながしけり

上人はこれに十念を授け、亡者は成仏昇天するという内容の箇所の絵である。

さらに、一例を挙げておく。元禄十二年大阪嵐座三の替り狂言『傾城蓮川』(近世文芸叢刊『絵入狂言本集下』)の挿絵にも、龍に追われて水面を逃げる逆さの女の図があり、そこに「今川さかゆうれいにげる」と説明がある。逆幽霊と名づけられたこの幽霊は、悪人の手にかかり沈めにかけられた一念で現われたと本文に見えている。

以上の諸例から自ずから判明するように、〝逆幽霊〟として西鶴当時かなり知られている図柄であり、非業の死を遂げた亡者の体なのである。更に言えば、その死にざまが、井や川に逆様に沈められ

た姿、そのままに現われたもののごとくである。

『織留』の絵に再び戻ろう。この慣習に照して見返すならば、手こそのばしてはいないが、これも逆幽霊の一つと見得るであろう。研究者諸氏も、この女の怪異性を感じられていた。吉江氏は、柱の怪を為す亡霊であり、井戸と女にまつわる怪談に縁の深いものであることを既に鋭く指摘されていた。当時の人々の多くは、この絵に亡霊の雰囲気を読みとったであろうし、更に傍の井に投げこまれて非業の死を遂げた女の怨念を、髪の形や手桶から流れる水の線、巻き上った釣瓶等の数々の無気味さから感得したことであろう。

吉江氏は、この女が逆柱の怪を為す亡霊であり、水汲みの婢女とされている。それにしても何故この亡霊が出現したのであろう。扇屋夫婦の移り住んだ逆柱の家が、たまたま怪談の場であったというだけなのであろうか。この女は、単に水汲みの婢女の幽霊にすぎないのであろうか。本文には、「此家むかしから逆ばしらのわざといひて。夜〳〵虹梁の崩るゝごとく寝耳にひゞきて魂をうしなひ。けれは。爰にも又居かねて」とのみあるのであるが、吉江氏の言われるように彼等の経験した不吉を一つにまとめ全体から一種無気味の雰囲気を感じさせようとしたとするには、内容との間に大分に離れがあるように思える。

私は次のようにこの絵を見る。ここは逆柱の怪の家での出来事であろう。夜半、虹梁の崩るるごとき屋鳴りに加えて、物皆逆さになる不思議が起り、そして井の傍に髪を長くたらした逆幽霊が出現した。眉を落したこの年増の女性は、視線を扇屋夫婦にきっと向けている。亭主はこしりを切り、女房は驚いて片膝立て逃げ出そうとしている。この二人、逆幽霊から驚きながらも目をそらし得ないでいる。それは、二人がこの女に何かのつながりがあるが故ではあるまいか。他の二人（近所の人とする説もあるが、奉公人とも考えられる）はただただ驚愕し、倒れうつむいてわななき、面を向け得ないでいる。夫婦につながりのあるこの幽霊とは一体誰人であろう。

それは扇屋亭主の姉であると私は考える。ここで、この章を今一度読み返してみよう。家主の女房と争った挙句、家を出なくてはならなくなった夫婦の間で、争いが起る。離縁を宣告された妻が言うことばは、

いかにも出てゆくべし。我追出さるゝからはそなたの姉御の頓死なされた時の首尾を世間へ沙汰しておいとま申

であり、この言ゆえに男は態度を一変して機嫌を取り屋移りを行った。爾来変るごとに不吉がつきまとう。それは誇張とまで思われるほどの事件の連続であった。一体、この妻が握っている夫の弱味、「姉御の頓死」一件とは如何なる事柄であったろう。

姉の突然の死は、実は弟の所為ではなかったか。その様は、井戸に手拭手桶をさげて水汲みに行った姉を、背後より突き落し、不慮の出来事と世間を欺いたものと容易に推理出来る。このことは、文末の夫婦の別れの際の口喧嘩の場と照応する。

其跡はいさかひ仕舞に。をのれもひとりは何として堪忍しておるまい。をのれも女もたずにおろふか、姉の銀盗人目と、わめき別れぬ。まことにのけば他人、さてもおそろしの人ごゝろや

西鶴はかく周到に、姉殺しの理由をも示している。暗に、この夫婦にからまる因縁ばなしを、前後呼応する形で設定していたのである。この挿絵は、逆柱の家において起った怪異の一場面の体にもてなし、実は人に洩し得ぬ夫婦の秘密を暗に示しているものであり、

逆に言えば読者にこの絵の意味を追わせ、作品の裏にある「おそろしの人ごゝろ」を読み取らせるためのこれは謎絵ではなかったか。姉の事件を隠徴に現わし、彼等について廻る不運は実は因果の理に乗るものであり、人の業の深淵をはっきりと覗かせる、作者の高次な遊びの姿勢であったと私には思われるのである。冒頭の屋移りについての謹め、女の口の災いの基であるといった表面上の教訓のみにまどわされてはならない。

それにしても、その脚色の妙に今更ながら感歎する他ないのであるが、かかる解釈は読み過ぎとして非難されるであろうか。

三

『西鶴織留』は西鶴の遺稿である。西鶴は自著に自ら挿絵を描くか、少なくとも下絵の稿をものしていたことは、大方の肯定するところであろう。ただ遺稿のこの作品においても、彼が自ら挿絵の稿を残していたか否かは疑問の余地がある。その遺稿の中には、彼の版下を探ることが出来るほど整った原稿も残されており、その中には挿絵もすでに準備されていた（拙稿「『万の文反古』切継考」『西鶴論叢』）。その意味では挿絵に西鶴自身意図をこめたとする拙論も成り立つ可能性があるが、しかし、挿絵も含めて残されていたとしても、その挿絵に関しては構図等すべて他の絵師に任せて描かせていたことも考えられる。初期作品の動きのある優れた挿絵群に比して、遺稿のそれの多くは月並であり平板なものであることは否定出来ないからである。『織留』の場合、原稿にすでに挿絵が含まれていたものかどうか、その挿絵に西鶴が関係していたかどうか一切不明である。蒔絵師源三郎風と言われているこの本の挿絵は、一般に単調であり、金井氏の指摘されたごとく、『世間胸算用』三ノ三の絵を五ノ二に殆どそのまま利用していたりして、絵師の手により付されたものと考えるのが妥当であろう。さすれば、これまで論者全てが絵師の意図によると見られていたこの逆絵について、西鶴が関わっていない以上拙論は当然成り立ち得なくなる。

にもかかわらず、私はこの絵に西鶴独特の精彩を感じる。たとえ、普通には挿絵を絵師に任せている西鶴であっても、特別の意図のある場合、その章についてのみ下絵を付しておくことは十分考えられるのではなかろうか。『織留』の場合にしても、この一図だけにとどまらず他にも下絵の存した章があったかも知れない。三ノ一その他おもしろい構図の挿絵も交っている。混在していると言えば、子細に検討すると本書の挿絵には源三郎風でない図も交っていることに気付く。五ノ三「具足甲も質種」の章のそれなど明らかに異筆であり、構図も他と一風異なる。この画風は、『庵桜』（貞享三）の西吟落月庵図のそれと繋がるものがあるように思える。この章は「二」であるのに本文内題は「四」とあり、一行の空隙もそのままに版にした不備の目立つ章でもある。他にも六ノ二と六ノ三の間の錯簡の問題もあり、本書の編集に際しては、従来から指摘されているように遺稿数種を取り合せて作った痕跡が濃い。このように他の絵師の挿絵を伴った稿も交っており、西鶴の下絵の付された原稿もその間にあった可能性は十分考えられるであろう。

挿絵画稿の存在の可能性を想定するにとどまらず、更に考究すべきことは西鶴が右に述べたごとき趣向を彼の他作品においても採るところであったか否かの支証の有無であろう。人々の見慣れた素材を下敷にし、その上に立って更に工夫をこらした作意のあとを他の

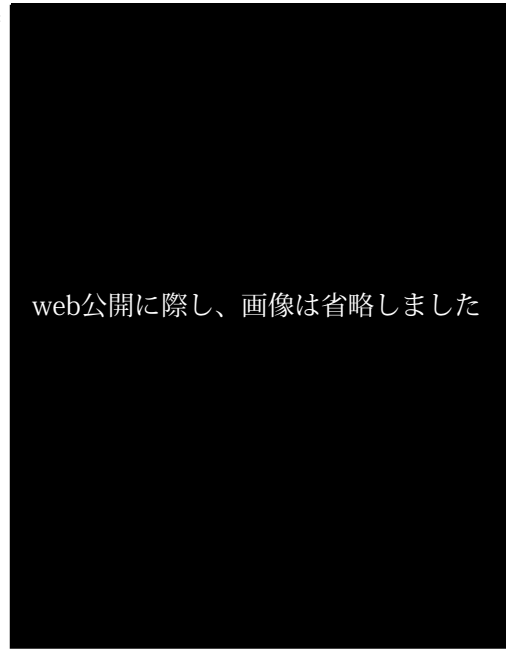
挿絵に求め得るであろうか。そして、それが文章とも密接に関わるような例があるであろうか。

それには彼の浮世草子の処女作『好色一代男』が好箇の対象と思われる。西鶴自作自画と一般に言われており、事実挿絵になみなみならぬ熱意を傾注し、謎の多いこの作品において、このことが例示出来るならば強い支えとなり得ると考えられるからである。

四

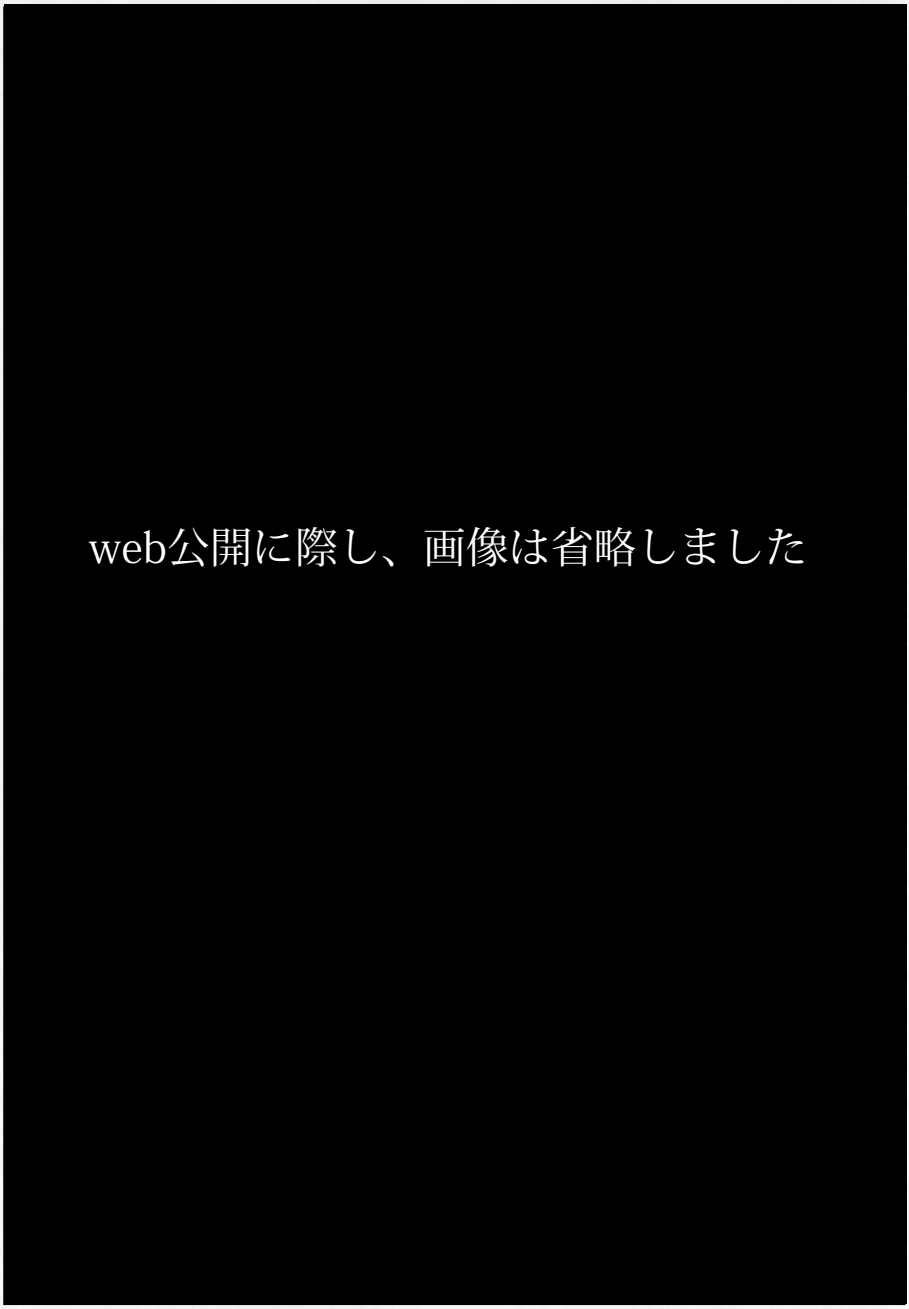
『一代男』には謎めいた絵が多い。例えば、島田勇雄氏の『好色一代男』成立の経緯(一)』(『文学』昭和四八年十二月)において、書きおろし説否定の根拠付けにその五ノ五の挿絵をめぐっての考察が詳しく説かれているごときもその一例である。氏は三十九歳の世之介が若衆髷に描かれてあることに注目され、悪戯でない限りその位置は不当であるとし、世之介元服以前に位置づけようとされている。確かにこの絵は不審である。しかし、ここに西鶴の意図を汲み取る立場もまた成り立ち得るのではないか。矛盾の解決が出来るとして、素案になかったと否定し去ることは容易である。しかし、西鶴その人が描くなり、或いは下絵を構想した挿絵において、出版段階においてもこの不備に気付かず済ますほど彼は迂闊ではあるまい。これにはそれなりの意味を西鶴はこめていると確信する。但し、この謎々はきわめて難解の部に属する。改めてこの謎に挑戦したいと思うが、今はこれにいささか関連のある一図を取り上げ、考察してみたい。

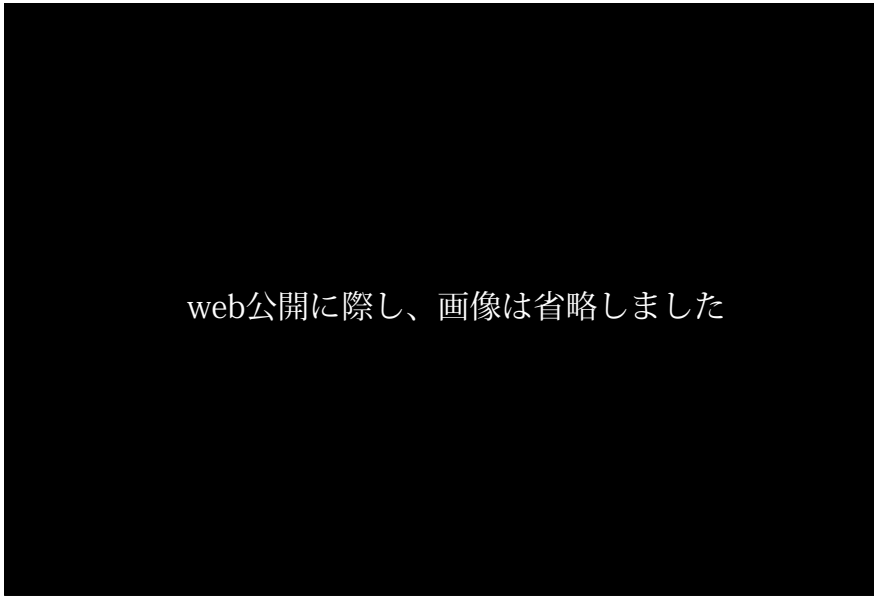
その図とは、巻三ノ四、世之介二十四歳の章「一夜の枕物ぐるひ」の、下に掲げた挿絵である。『一代男』全篇を通じて数指の内に入る



傑作の一つと頃日考えている絵であるが、従来よりこの絵はさほど問題にされていない。堀章男氏が、『「好色一代男」の挿絵』(『武庫川女子大学紀要』昭和四一年三月)において、この絵の構図全体がざこ寝の混乱の雰囲気を伝えており、本文に忠実な図柄といえるが、細かい点で本文との齟齬もあり、世之介が老女でなく若い女の手を握っている点など西鶴の無頓着さを指摘出来るとされている程度で、一般にこの絵に謎めいたものを感じていない。

この絵の素晴らしい群像に、水谷不倒氏の言われるごとく生気躍動の気を私は感じ、原画を片手に日頃楽しんでいたが、その度にこの絵の背後に何かの心象を感じていた。ところが、それが何である


web公開に際し、画像は省略しました



かが一向に思い浮かばない。その都度もどかしさを覚えながら、しかし何かがあるに違いないという感を拭えずにいた。昭和四十五年の某日、若い友人のU君と西鶴の挿絵について歓談中、この絵を展げた際一瞬ひらめいたものがある。〝涅槃図〟。永く無意識の中に探っていたものがやっと像を結んだのであるが、それは釈迦入滅の群像図であった。大原ざこ寝の様々の男女の姿態裡に、釈迦の涅槃に悲泣する男女の身悶えの体が重なり合ったのである。

涅槃図、それは当時の人々にとり幼時より馴染の絵であった。二月十五日涅槃会には、寺々にこの像を掲げ追悼の法会を修する。したがって筆彩画や版画の涅槃図は、現在に残るものきわめて多い。例えば版画については平塚運一氏の『涅槃古版画集』(彰国社刊)が、その概要を知るに好箇の著であり、七十五図の多きを収録している。しかし、たまたま目にする古版画は、殆ど右の諸図とも異なる版式のものであり、その布及のほどは量り知れぬものがある。

その図柄にはかなりの異同があり、その内のどれを西鶴が摂ったという風には指示しがたいが、それでも両者の間で大凡の関係づけを行うことが出来る。中央黒衣のうつぶせに眠る女は、大地に迷倒し死人のごとく歎く法衣の阿難尊者、彼女の下に伏せる男は阿難の隣に描かれる日光長者、その左の顔を床につけうつぶせに伏す女は愛徳夫人、床下より手をのばす世之介は迦葉童子かまたはくきら尊者でもあろうか。彼の前の頭巾をかぶりあご鬚の男は金剛力士であり、その右あごに手をあて座って眠る女は普賢菩薩といった比校が可能である。文中「神前の拝殿」とあるこの絵の舞台も、涅槃図の釈迦の横臥する宝床と、その四周、東西南北各二本の娑羅双樹と見立てられる。一枚摺涅槃図一般には、床の前方を空けて側方と後方

に八本の樹を描くが、草子に描かれたその図はこれを四本とし、あたかも四柱のごとく描くものが多い（これは四本の枯れたる体を現わすものか）。前頁左の掲出図は、『無常重夢物語』の下巻の図であるが、この種の例は説経節正本『しやかの本地』の数種にも見ることが出来る（『説経正本集第一』）。『一代男』の場合、子細に見るとこの拝殿の柱は前方の二本と後方の二本とでは立つ所が異なり、後方分は地面に直接立つごとくに見える。

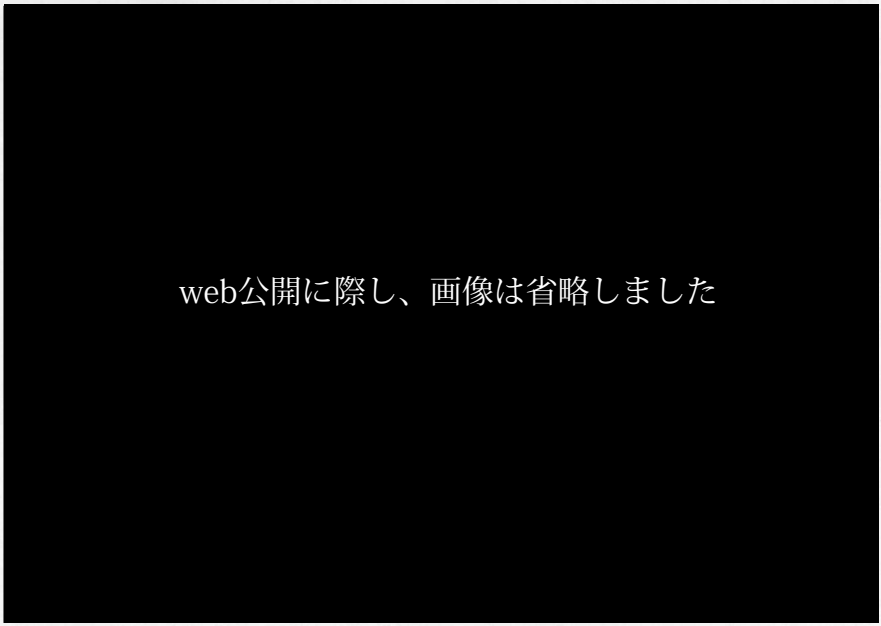
このように、直観的にこの挿絵の粉本を涅槃図と感知したのであるが、この西鶴の改構について大方の同意を得るためには余りにも両者の隔たりの大きいことは認める。この径路を更に埋める要があるであろう。

再び『一代男』の挿絵に戻って画面を見るに、後方に七名の男性の中でただ一人の前髪の少年があり、彼がくらがりにその手を捉えた女性はこれまた画面八人の女の中でただ一人の老女である。滑稽軽妙の筆致をここに見るのであるが、注目すべきはこの老女の髪形である。普通老婆の髪形は、『一代男』巻三ノ一の絵の中央部のそれのごとく置綿などを頭においた髷で、この種のものは『女用訓蒙図彙』その他の書を閲しても見つけることは出来ない。しかし、諸書の挿絵を探ると『堪忍記』等の中国を舞台とした図の老婆に類似の髪形を見出すであろう。そう言えばこの老女の服装も他の女達の着物姿に比し、中国服的である。裾の黒いへりもまた前掲書等の漢土の風を示す絵に頻出する。こうした点に当時の人であれば不審を抱いたに違いない。巻三ノ四の世之助前髪の異様さは、挿絵の展開の上で浮んでくる問題であるが、この図の場合はこの図柄だけで気付く謎ではなかったか。これまで近代の読者は挿絵の無い本、またはせいぜい名刺程度の挿絵で西鶴本を読んできた。しかし原本の縦二十糎・横十六糎程の枠内一杯に描かれた挿絵（挿絵と言うには余りにも大きい。むしろ今日の絵本の絵というべきか）の中心部に、四・五糎の大きさで描かれたこの老女の姿態に、謎を感知した人々もかなり居たであろうと見るのは私の僻目であろうか。

この謎の解は、前掲涅槃二図の宝床の右方に立ち釈迦の足を頂く老女に目を向ければ瞭然である。彼女は図の上では「老女」「らうによ」とだけ記されているが、百歳の優婆夷、鬱波尸女であり、大衆と共にこの場に乱れ入り、大いに哭し、自己の供物の貧なるを歎じて落涙にて仏足に汚点を残した（袋中『涅槃像考文抄』）女性であり、涅槃像に常に点出されている老女であった。

女の髪形について今一つ注意しておきたいことは、この図大原の里のざこ寝の体であり、「庄屋の内義娘。又下女下人にかぎらず。老若のわかちもなく」うち伏す景である筈であるが、画中の他の七人の髪形に注目するにいずれも兵庫髷の傾城風の女性である。到底里の女達とは考えられないのであるが、ここにも不審が立つ。このことも涅槃図と対比すれば理解出来る。涅槃図中の女性は殆どが菩薩達であり、その髪は一様に所謂菩薩の結髪宝髻である。その感じに近い髷をここでは示したものと言えよう。

西鶴の作為のあとをかく辿ったが、釈迦入滅の尊像をかくも大胆に「なをす」所業は、転合好きの西鶴を措いて他に見られぬものなのであろうか。こういう視点で調べてみると、意外に多くの涅槃図「なをし」の図が見られる。宗教性の濃いところで言えば、池上宗仲館での日蓮涅槃像一枚摺（足下に三沢日弘尼を配する）、一枚起請文の下に源空臨終の図を描いた一枚摺、『弘法大師行状絵詞』に載



る恵果の入寂図などを見出し得る。宗教性を逸脱したものについてみれば、英一蝶描く見立業平涅槃図（文化財保護委員会保管）などその尤なるものである。衣冠束帯の正装で足を交叉して一代の好色男業平が横臥し、白い綿帽子の老女（六三段つくも髪の女の見立か）がその足を頂く。伊藤若中の戯画「野菜涅槃図」も見立涅槃図の展開の中でも一きわ機知に富む傑作である。籠を伏せた床上に横たわるは二股大根という秀抜な見立であった。俳聖芭蕉の終焉もその徒にとっては仏の涅槃に等しい。江戸寺島蓮華寺の「蕙斎略画芭蕉翁臨滅度之図」の碑は、鍬形蕙斎の筆にかゝり、五十二類に比して軽妙に群像を描き出す。図中滑稽の最たるものは、金剛力士に比した大津絵「鬼の念仏」であり、奇奇妙妙と言うべきである。今一例を挙げておく。上の掲出図がそれであるが、これもまたその伝統に乗るものであることは、一目瞭然である。安政元年三十二歳で自ら命を絶った八代目団十郎を悼んでの当時の死絵の一枚であった。

かく、西鶴ひとりにとどまらず、わが国奇想の系譜は連綿たるものがあることを如実に知る。

五

『一代男』の一図を、西鶴の謎絵とみて如上絵解を行ってきたが、このように謎を投げかける彼の狙いとするところは一体何であったのか。『織留』の場合はそれにより内容のより深い味読を要求するもののごとくであった。本章の場合は如何であろう。勿論、この関係を悟った時、挿絵世界そのものの中での楽しみも大きい。見立の趣意を発見することのおもしろさ、その類似と離れの妙を辿る興味も尽きない。西鶴がヒントとして涅槃図中の一人物をそのまま点出

した問題の老女に焦点を絞るならば、聖なる仏足を頂く老女の手を、色を知り始めたばかりの若者が捉える体に置換する奇想など、その最たるものであろう。

しかし、西鶴は単に挿絵の上のみでなく、文章にもこの絵との連関を表わしているよう思われる。ざこ寝の状景描写も、『釈迦の本地』・『釈迦一代伝記』等の入滅を人々が悲しむところの「…もあり、…もあり」と綴る表現と通うものがあるが、さらに世之介が後をつけ契りを結んだ色白き変装の美女の言葉とその後の叙述にも関連がうかがわれる。

都の人ならば、なをゆるし給へ。我にこゝろを懸し人かぎりなきをうるさく。姿を替て、やう〳〵のがれ待るにと。かたるに。なをやめがたく。一世の約束して。見すてな。捨まい。末は千とせの。松陰に木隠れ。かゝる所へ。たくましき。若きものゝ。五人七人。又は。三四人差のかしこの。せんさく。此里の美人がみえぬと。声〳〵にのゝしるは。此女の事にぞありける。

これらの表現の裏に、末世一代教主の如来の涅槃の理とその経過を表わしているもののようである。無量無辺の衆生済度の誓願のもと、かりに悉達太子に化身した久道実成の釈迦仏は、八十歳の寿命を限りとし、生者必滅の機を現わし発菩提心を生ぜしめんと、娑羅双樹の間に横臥し、紫摩黄金の本の仏形を衆人に示した後、涅槃の雲に隠れたまう。「末は千とせ云々」は謡曲の文句取りもさることながら、末法思想に基づく、正法時千年、像法時千年、末法時万年を懸けて言えるものであろうか。美人を尋ね廻る人々の影は、入滅後弟子と共にはせつける迦葉や迦毗羅国王等如来の眷属、摩訶陀国の阿闍世の一類が遅参し悲泣する姿と重なるものがある。

すなわち、西鶴はこの章の内容もまたその挿絵と照応させていると言うべきであろう。絵の上でも目に立つ老女の一夜の恋（それは正に狂言「枕物ぐるひ」の恋でもある）、それは実は美女の変身であったという二重構造の裏に、更に釈尊涅槃の相を籠める多彩な構造がここに見られる。西鶴の奇想天外、大翼を拡げてとどまるところを知らない。それにしても、読者一般にこの作意を悟らしめ楽しませようとしていたとするならば、それはいささか無理な注文と言わざるを得ない。

西鶴自身も、これを積極的に趣向として読者に汲み取らせようと考えていたかははなはだ疑問である。それでも彼は謎を投げかけた。投げかけたかった。それは決して無頓着といったものではなく、周到に計算した謎だてであった。『好色一代男』の著者が、大原ざこ寝の章の絵と文の中に、涅槃図の絡まることをかくも読者に知らせたかった理由は一体何であったか。

『竹斎』（寛永刊本）上に、次の文章がある。

女はう一人立かへり。とてもしぬべき身なりせば。あすまでと思ふはかなさよ　ゆふさりまいりて上人さまとまくらをならべて。ねはん成へし。をせんだく物もあらば。給はれやとてかへりけり。

同様の「涅槃」の例を浮世草子に見る。『傾城禁短気』（宝永八年刊）巻一の一。

それ人と生れたる証には、色道を知り女色の面白きといふ事を悟るべし…八宗・九宗に分りてより、さま〴〵位に高下ありといへ共、元は一つの陥穴涅槃の床に至っては、何れか上品上味の喜悦の所に違ひはなし

同書五巻目録。

[此段ハ]黄金の力にて、一旦床の上へ迎ひ取らるゝといへ共、振り付られて涅槃に入る事を得ざる縁なき衆生に、睟だてを止めよとの教へを記せり。

これらの用例は、「涅槃」に閨房における悦楽の極を釈尊の極楽往生に擬して言う義の存したことを明示している。近世にあっては、大原の「みだりがはし」き男女のざこ寝を涅槃と同一の次元に置き得るものであった。この大膽な作意こそ『絵入　好色一代男』の真骨頂と知るのである。聖なる涅槃像を、一夜の歓を楽しむ群像として活写する。俗なる好色絵に改構し、文章面にもそれを翻案して織りなすその手法の妙にはただただ嗟嘆あるのみであるが、その西鶴の奇想の裏に同時に近世そのものの逞しい息吹きをも感じる。

むすび

再び述べるが、西鶴の奇想は一般の理解の遠く及ばぬところにある。清冽なる泉のごとく滾々と湧出する発想の跡を辿るのは至難である。西鶴もまた読者の能力をまるで顧みることなく筆を走らせる。しかし、自らの述作の誇るべき趣意を、時に読者（その範囲がきわめて問題になるが）に知らせたい誘惑にかられる。その時読者にも目を向け、助けを与える。それは多く謎絵の形をとって現われているもののように思う。正に、「しる人はしるぞかし」とつぶやく所以である。

このような彼の創作態度からしては、その当時の人々にしてもごく一部を除いては到底よく理解し得なかったようである。踵を接して江戸で出版された師宣描く『世之介　好色一代男』では、西鶴の作意を掴み得ず無残に改竄して了っている。謎の老女は平凡な純日本風の老婆に変っている。恐らく謎めいたものは感じても、その意味を理解するに至らなかったのであろう。また、『織留』の正徳二年再版本では、逆幽霊の姿を削って了った。書肆側の無用のさかしらがこのように見られるのも、その意図は一般に理解されなかったということを端的に示している。

近時、西鶴の挿絵についても、先達の後を追って研究する者が増加しつつある。更により深い意味を挿絵から読みとろうとする論稿も相次いで発表されている。若木太一（『西鶴名残の友』挿絵考）・井上敏幸（『本朝二十不孝』の方法・『恋び扇の長哥』の方法）・松原秀江（西鶴『一代男』の好色）等の諸氏の業績がそれである。こうした研究の積み重ねにより、西鶴の絵と文の相関性を徐々に固めてゆく必要がある。

西鶴は文章の構想に際して、挿絵も同時に構想し、文が挿絵を決定付けてゆくのみならず、挿絵の世界から想像の翼を拡げて文章をも包みこむ。つまり両者一体しての創作の過程が見られること、少なくとも『絵入　好色一代男』においてはその姿勢が顕著にうかがえることを稿を改めて論じたいと考えている。ここに挙げた一例を以てしては不十分であることは勿論承知している。『一代男』の中には、ここで問題にした老女と同じ体の女を点出し、謎を投げかけている箇所が今一箇所ある。巻二ノ七「うら屋も住所」の章である。この所でも同様の作意があると思われ、改めてこれも扱ってみたい。また、全体構成の中で巻三ノ四が大原ざこ寝の場に設定される事由等も考慮すべきであるが、ここでは西鶴の少なくとも初期浮世草子の理解に際しては、その挿絵も共に光を当てなくてはならぬことを

提言するにとどめる。

それは容易なことではないが、また同時にきわめて楽しいものでもある。正しく『一代男』跋文の、「…転合書のあるを取集て荒猿にうつして稲臼を挽薬口鼻に読てきかせ侍るに俚諺田より闕あがり大笑ひ止ず鍬をかたげて手放つぞかし」を地でゆくものである。だが、この戯文をそのままに受け取るのは愚かしい。薬口鼻に読み聞かせただけでは偉大な転合書のこの笑いは汲みとれないであろう。私には仲間を前にして講釈して作意の種明しに打ち興じる西鶴の姿と、瞬間人々の間に湧き起る溜息と哄笑をこの文間に感じとる。それは丁度、「殊に頃の座懐紙、放埒の雲をつかひ、四十五句五十句は遊女の噂、歌舞伎芝居の風情、残る四十句は博奕わざ、喰物等、抜脱、こゝろ行の付かたとて其座に一人も聞えず、我計うなづきて一句〳〵に講釈、大笑ひより外なし。」（『大矢数』跋）の状景と重なるものであったろう。

（附記）　本稿をなすに際し、北小路健・三井淳生・片桐洋一の諸氏に資料面で御配慮を賜わった。記して深甚の謝意を表するものである。

（本学助教授）